

関係発達論から得たいくつかの気づき

大倉得史
(九州国際大学)

はじめに

こんにちは、大倉です。よろしくお願いします。今回、松本さんのほうから鯨岡理論について何か発表してくれということで頼まれたときに、正直本当に嫌だったですね。わたしは今、紹介があった通り、鯨岡先生の研究室、門下生ということで、その門下生が師匠の理論について、師匠のいる前で何かを言わなければいけないというこの事態は相当ハードなものだということをちょっとご理解いただけたらな.....しかも先ほどのエピソードを聞いてしまった後では、もう何も言えないなと思って、余計嫌になってきたんですけれども。

そういったことで、本当に先生の理論というのは研究室を卒業して5年ぐらい経ちますけれども、今でもやっぱりわたしの大きなよりどころですし、先生がちょっと書かれたような一言一言でもその深い意味というのを考えることで自分自身の方向性を模索していく、そうした導きの糸にもなっています。

その一方で、じゃあ鯨岡先生の門下生として先生の言われているようなことを解説したらいいのかとか、同じことを繰り返したらいいのかというと、これもちょっと面白くないなと思ったですね。やっぱりここにおられる皆さんにしたら、「それだったら先生のお話を直接聞いたほうがいいわ」という話になるでしょうし、鯨岡先生からも「お前、もうちょっとほかに何か言いなさい」ということを言われそうなので、ちょっと困ったことになってるんですよ。いわば先生の理論の外部からちょっとしたコメントを付け加えるなんてことは到底できないし、完全な内部からこの解説をしてみても仕方ないということで、いたい鯨岡理論について何を言おうか、あるいは関係発達論についてどんなことを言ったらいいんだろうかと、いろいろ考えていた挙げ句にですね、ふと浮かんだ問いというのが、「果たして自分は関係発達理論をやっていたんだろうか」ということです。

自分のは関係発達論なのか？

わたしは、青年期のアイデンティティ問題、あるいは主体性の形成といった問題について主に研究をしてきました。今もありましたけども、友人たちととりとめもなく「自分って何だろう」といったことをしゃべり合う、「語り合い法」という方法を考えて、そしてそれを発展させてきたということがあります。そんな中で先生にいろいろお教えいただきながら、無我夢中で試行錯誤して「語り合い法」を練りあげていたんですけど、その中で、「自分がやっているのは関係発達論なのか否か」といったことを表だって意識するということはそんなにありませんでした。もしかしたら潜在的にはずっとあった問いなのかもしれないですけども、「鯨岡先生に教えていただいているわけだから、当然関係発達論なのだろう...」という前提が自分にもどこかにあったし、周りの人からの評価、視線というのもそういった前提みたいのがあったような気がします。

自分のは関係発達論なのか？

- 青年期のアイデンティティ問題や主体性の形成について
- 語り合い法
- 当然、関係発達論だと思っていたが...

→そもそも関係発達論とは何か？
頭で理解するのと、実際にやるのとは大違い

ですが、じゃあ、自分は本当に関係発達論をやっていたのだろうか？ これをいざ考えてみると結構難問ですね。そもそも、関係発達論とは何なんでしょうか。先ほど先生から、「コペルニクス的転回の線が1本じゃなくて実は2本だったんだ」とかね、「親子関係も実は三者関係、そして兄弟関係もここに入っているんだ」なんてことが語られて、「ああ、そうかそうか」と思って聞いてしまえば聞いてしまえるんですけども、じゃあ何で先生はずっと1本で書かれていたのか、そして今この段階になって何であれが2本線になり、4本線になりということを言いだされたのかということを考えだすと、結構、難しいというか、関係発達論の本質にも関わるような部分だと思います。

そんなふうに実はさっと聞いてしまうと結構分かるんですけども、頭で理解するのと、いざ実践してみるのというのは結構違うもので、自分が「関係発達論的にものを考える」ということをいざやろうとすると、これはものすごく難しいんだなあというふうに感じます。今でもわたしは、自分の書いたものに対して先生からかなり厳しいコメントをいただくこともありますし、そうしたたびに、自分は本当に関係発達論をまだものにできていないんだなあというふうに感じることもありますし、逆に自分というのは、「本当に関係発達論をやっているのだろうか」というような疑念、もしかしたらもうちょっと違う枠組みでものを考えようとしているのかもしれない、こんな疑念も生じるわけです。

関係発達論というパラダイム転換

いったい関係発達論とは何なのか、こんな問いがこうして浮上してきたわけです。ひとつ言えることは、関係発達論というのはこれまでの心理学研究と非常にさまざまな点で異なっているということだと思います。先生の言葉を使って言えば、それこそあまりに多くのことが異なっているがために、もう心理学研究ということの枠組み自体を変える必要がある、パラダイム転換が必要だというようなことになると思います。関係発達論というのを本当の意味で理解するためには、こうした異なる一つ一つのことに對して地道に頭を切り替えていく作業というのが、たぶんどうしても必要なんじゃないかなというふうに思います。昔に比べれば、多少なりとも関係発達論、先生のおっしゃっていることが何となく分かってきたなあと考える僕自身の、わたし自身の体験を振り返ってみても、やっぱりそうした切り替え作業の連続だったな、繰り返しだったな、というふうに思います。

関係発達論というパラダイム転換

- 従来の心理学研究といろいろな点で違う
- 私自身も一つひとつ頭を切り替えてきた

→私がどのような困難の中で、どのような気づきを得たか

きょうはそうしたことで、皆さんにも、わたし自身が関係発達論からどのようなエッセンスを引き継いだのか、どのような困難にぶつかって、そして関係発達論とどのように格闘して、その中でどのような気づきを得てきたのかといったことをお話していきたいと思います。先生のいくつかの重要な概念というのがたくさんありますけれども、その中のいくつかの概念を取りあげて、その概念とわたしがどんなふうに格闘してきたのかというようなことをお話できればなというふうに思います。また、わたし自身、そうした作業をする中で、今後関係発達論というのを展開していくための何かヒントに出会えればいいなということも考えています。

両義性

さて、じゃあさっそくまず取りあげたい概念。先生の概念というのは一つ一つ、すべての概念が密接につながっているのです、どこから始めたらいいのかというのは悩むところなんですけれども。まず、両義性という概念からちょっと取りあげてみたいなというふうに思います。両義性というのはご存じだと思いますけども、あらゆる物事に矛盾するような2つの側面があって、正と負とか、表と裏といってもいいと思いますが、そうしたすべての物事に矛盾する2つの側面があって、そしてそれが深く絡まりあっているということを示唆する概念です。いちばん代表的なのは、根源的両義性かなと思うんですが。人には他者とつながって気持ちを共有することを欲する、そうした契合希求性と、自分の思いを貫

いて何かを実現したいという自己充実欲求ですね。この2つが人のなかに、一見相反するような傾向というのが2つあって。しかも契合希求性のほうは、元々それは自分が誰かとつながりたいという、自分の思いなわけですから、自己充実欲求に根ざしている。自己充実欲求のほうも、何かを実現する／したいという思いは、人からの賞賛とか評価があって初めて満たされるというところがあって、そういった意味で、自己充実欲求のほうも契合希求性に支えられている。まあ、2つは密接に絡まっているということですね。ほかにも大人と子どもの間の存在両義性だとか、「わたし」ということと「わたしたち」という集団、その集団の一員でもあるというような両義性だとか。人間というのは、いろんな両義性にそれこそ貫かれているという意味で、そこに人間存在のすごく悩ましいところというか葛藤とかドラマとかが生まれてくるという意味では、人間存在の本質を突いたような概念だなというふうに思います。

この概念を大学院の講義の中で先生が紹介されたときも、やっぱり、「最近、人間というものを説明するためにどうしても外せない概念というのがあってね」なんていう前置きから、両義性についての解説を話されたのを覚えています。ただ、それを聞いていたわたしは、どうしてこれが人間を説明するための本質的概

両義性

- あらゆる物事に矛盾する二つの側面がある
ex) 契合希求性と自己充実欲求の根源的両義性
- どうしてこれが人間を説明するための本質的
概念なのか？
- そうしたあり方の原因やメカニズムの解明が
「研究」ではないのか？

念なのか、これが理解できませんでした。なんとなく、人間が両義性に貫かれているというのはよく分かる。ところが、どうしてその両義的なあり方というのが生じてくるのか、何が原因でそうした両義的なあり方が生じてくるのか、そうした人間の感情とか行動がどういったメカニズムで生じてくるのか、そうしたことを明らかにし、説明しなければそれは研究ではないんじゃないか。「人間存在は両義的である」、というだけではあまりに漠然としすぎている。これがわたしが初めてこの概念に対して抱いた印象でした。

エリクソンのアイデンティティ論

ところで、当時わたしはエリクソン……青年期研究をやる中でエリクソンのアイデンティティ論を一生懸命勉強していたんですけども、そのエリクソンのアイデンティティ論についても、似たような印象というのを抱いていました。わたしが知りたかったのは何が原因でアイデンティティが拡散するのか、また、それがどういったメカニズムで達成されるのか、アイデンティティというのはそもそもなんであって、何がどうなれば達成したことになるのか、これを知りたかったですね。で、そのときに当然、わたし自身も当時一人の生活者として、自分のアイデンティティというのをどこかで求めている。そうした切迫し

た問題意識がかなり強かったというのもあったと思います。これを知りたかった。

で、一生懸命エリクソンを読んでみるんですけども、エリクソンは一言、メカニズムについてはこの一言ですね、「自我の統合機能によってアイデンティティが達成される」。以上。これはわたしにとっては何か肩すかしを食らうような……で、もっともっと知りたいなというところで、エリクソンは次に「こうい

たことで個人の人生は、アイデンティティを求めてこうなっていく」とか、「文化的アイデンティティはこうあって……」とか、文化の形態の描写になっていく。もっと知りたいメカニズムの話はサラッと流されるような印象があった。いったい何が原因でアイデンティティが拡散して、どうやってやれば達成できるのか。そうした問題の問いへの答えとして、これではあまりにも漠然としすぎている。両義性という概念もアイデンティティという概念も、わたしにとってはすごく似たような印象を与える概念でした。

エリクソンのアイデンティティ論

- 何が原因でアイデンティティが拡散し、どういったメカニズムで達成されるのか？
(一生活者としての切迫した問題意識)
- 「自我の統合機能による」というあっさりとした説明
- 個人の人生史や文化の形態の描写

西平直『エリクソンの人間学』(1993)

こうしたモヤモヤの突破口をひとつ切り開いてくれたのが、京大の西平先生ですね。『エリクソンの人間学』という本です。アイデンティティ概念は、研究者が“生きた現実との往復運動の中に自らを住み込ませるための場、たとえば、戦場からの帰還兵たちの生きている世界をまるごととらえるための、より正確には、彼らとの関係の中に住み込むための手掛かりとして”使われているのであり、“現実の曖昧さを処理し、説明するために使われたのではなく、むしろその曖昧さと付き合い続けるための手掛かりとして、いわば「発見的 (heuristic)」な機能をもって使われた”(西平, 1993, p59) と

か、エリクソンの議論は“アイデンティティという言葉によって<何か別のことを説明している>と同時に”、“今度はむしろ一旦立ち止まって、<そのアイデンティティという言葉それ自体を説明しその意味内容を再検討する>”(西平, 1993, p62) というふうに進んでいく、とか。まあ、こうした解説があった。

要するにエリクソンというのは、初めにアイデンティティという概念に明確な定義を与えてから話を始めているわけではなくて、そしてそれによって現象のあいまいさを片付け

西平直『エリクソンの人間学』(1993)

- (アイデンティティ概念は、研究者が)“生きた現実との往復運動の中に自らを住み込ませるための場、たとえば、戦場からの帰還兵たちの生きている世界をまるごととらえるための、より正確には、彼らとの関係の中に住み込むための手掛かりとして”使われているのであり、“現実の曖昧さを処理し、説明するために使われたのではなく、むしろその曖昧さと付き合い続けるための手掛かりとして、いわば「発見的 (heuristic)」な機能をもって使われた”(p59)

で説明していこうとしているのではなくて、どちらかといえばそのアイデンティティという概念を使って、さまざまな現象を記述しながらこのアイデンティティという概念がいかにか有効なのかを示していく、そうした手法をとっているということです。客観主義的な、実証的な研究では操作概念の厳密な定義、これからすべてが始まるということがありますが、

- (エリクソンの議論は)「アイデンティティという言葉によって<何か別のことを説明している>と同時に」、
「今度はむしろ一旦立ち止まって、<そのアイデンティティという言葉それ自体を説明しその意味内容を再検討する>」(p62)というふうに進んでいく

→はじめに明確な定義を与え、それによって現象の曖昧さを片付け<説明>しているのではなく、それを使って現象を<記述>しながら、その有効性を示していく

それとは逆に、まずあるキーワードでさまざまな現象を記述してみせて、そしてそのキーワードの意味と射程を探っていくというような記述的な心理学研究があるのではないかと思います。言い換えると、複雑な現象をいくつかの単純な概念で簡単にしてしまっ、その法則性・因果性を明らかにしていく<説明のための概念>というのと、複雑な現象をいわば複雑なまま、あるいはより複雑に、より深い意味においてとらえるようなく記述のための概念>というのがあるのではないかと思います。

で、<記述のための概念>というのはいわば新たな側面、今までなかったような視点から現象を照らし出すような照明装置であって、その有効性、機能というのはそれがどれほど豊かな視点を今までの常識を打ち破って提供しているかということが、この概念の有効性の鍵になると思います。

• <説明のための概念>

複雑な現象をいくつかの概念で単純化
その法則性、因果性を明らかにしていく

• <記述のための概念>

複雑な現象をより深い意味において捉える
新たな側面から現象を照らし出す照明装置
どれほど豊かな視点を提供しているかが鍵

で、当時わたしは元々理系出身だったこともあって、研究というのは当然現象をいくつかの要因によって因果的に説明して、そしてそれがどうなっていくか予測してその法則性を明らかにする、そういったことが研究だという漠然としたイメージを持っていました。けれど、恐らく、今述べて明らかなように、エリクソンのアイデンティティにしる、鯨岡先生の両義性に

• 当時の私の研究イメージ

現象をいくつかの要因によって因果的に説明し、その法則性を明らかにする

<記述のための概念>

アイデンティティ・・・「自分とは何か」を問う人間
両義性・・・矛盾する二つの傾向に貫かれている人間

→いずれも、複雑な現象を丸ごと、深い意味において捉えるためのもの

しろ、おそらくこれは記述のための概念なんだなということに気付いたんです。アイデンティティというのは「自分とは何かを問う人間」、また両義性というのは「矛盾する2つの傾向に貫かれている人間」というような、ちょっと着目する視点は違いますが、ど

ちらもやっぱり人間存在の本質を突いている概念だなあというふうに思います。こうした概念の機能というのは、複雑な現象を丸ごと深い意味においてとらえるためのもの。そうしたところに真の有効性がある概念なので、どこかでこの現象を単純化してメカニズム論的に考えて、その法則性とか変化の予測とかを求めている、あるいは原因を求めている、そんなわたしにとっては何かちょっとはぐらかされるような印象を与えるものだったのかなというふうに思います。

「両義性概念による青年期素描」

驚いたのがですね、自分で、先生の講義を受けてレポートが出たんですけど……まあ、レポートを書きなさいと。で、そのレポート、「両義性概念による青年期素描」というレポートを提出しました。で、驚いたのは、先生の両義性という概念を使ってやると、青年期の心の揺れ動きというのが、いかに詳細に、また豊かに、ひとりで出てくるかということです。

＜記述のための概念＞の力ってすごいなと思いました。これがうまくはまったときには、すごいパワーをもって豊かな記述というのが生まれてくるんだなと実感した次第です。このレポートというのは、先生が提唱されている根源的両義性だとか存在両義性だとか、さまざまな両義性に加えて、人間というのは「言語によって自分をとらえたいという指向性」と「言語によって自分を規定されたくない」という指向性の両方があるのではないかという「言語両義性」なんていった、自分なりの両義性のアイディアを出しまして、今でも結構印象深いレポートです。

はい。まあそういったことで、両義性……何が原因で両義的なのか、その原因は最後まで分かりませんでしたけれども、ともあれ人間が両義的存在であるということを認めてしまって、いわば数学でいう公理の位置にすえてしまって、そこから現象を眺めてみると、単純なメカニズム論以上に非常に豊かな視界が開けてくる、こうした研究の手法があるんだなあということを感じました。現象を豊かに記述することの面白さ、大切さと、その記述のために用意する概念の重要さということを、両義性ということをめぐるって考えさせられたなというふうに思います。

「両義性概念による青年期素描」

- ＜記述のための概念＞の力を思い知る
- 言語両義性のアイデア

→両義性の「原因」はともかく、それを「公理」に据えて現象を眺めてみると、豊かな視界が開けてくる

→現象を豊かに記述することの面白さ・大切さと、用意する概念の重要さ

ウルトラ体験主義、メタ観察

さて、次にちょっと取り上げてみたいのが、ウルトラ体験主義とメタ観察という概念で

す。ウルトラ体験主義のほうは、生活現場で
の人々の体験そのものから出発しようとい
うスローガンで、またメタ観察というのはエ
ピソード記述に付けられる理論的な解説と
か、理論的なコメントというふうに理解され
ている方も多いのではないかなと思います。
決してそれが間違っているというわけでは
ないんですけども、わたしが思うに、想像
以上にこの2つの概念というのは深いところでつながっているのではないかなというふう
に感じています。

ウルトラ体験主義、メタ観察

- どうして事象のありようを生々しく「描き出す」
ことが研究なのか？
→先生の返答「最終的には＜表現＞すること
が＜説明＞することにつながっていく」
- 青年の心の動きを生々しく描き出そうとする
一方で、それがなぜ生じるかについての理論
的説明をも志向する

鯨岡研究室のメンバーに、鯨岡研で叩き込まれたことは何かと聞けば、だいたいほとん
どの人が答えるだろうと思うのが、やっぱり「事象を生き生きと描きだすこと」。また「事
象の持つ説得力によって語らしめること」。ともかく研究室でゼミがあると、エピソードが
どれだけきちんと描けているかということに、かなり多くの時間を使って議論がなされま
すし、研究室のメンバーが気にするのもそういったことですね。どれだけ事象を生々しく
描きだすのか。ところがそうした議論の中でわたしももっともらしく「こうしたほうがい
い」とか言うんですけども、ときどきわたしの中に生じたのは、「どうして生々しく描き
だすことが研究なのか」という問いでした。考えようによっては研究なんかよりも、例え
ば小説や映画といった芸術とか、あるいはNHKでやっているようなドキュメンタリーとか、
そうしたもののほうが人間の生の様相というものを描きだすのに、よっぽど優れた方法な
のではないかと。よほど研究は負けているのではないかなというように感じたりもし
ました。で、先生に聞いたんですね。「研究には2種類あって、何か『現象の変化を予測し
て説明していくような研究』と、むしろその『現象のありようというのを生き生きと記述
していくような、表現するような研究』と2種類あると思うんですけど、先生はこの両方
の関係をどういうふうにお考えですか？」と聞いたんですね。で、さきほど述べた＜説明
のための概念＞というのと、＜記述のための概念＞という、この2つの区分が自分の中で
結構大きかったということもあってこんなことを聞いたんですが、それに対する先生の返
答というのが、「最終的には表現することが説明することにもつながっていくと思う」とい
うことだったと思います。

で、この答えが僕は分からなかったですね。どういうことなんだろう？ で、一応、鯨
岡研に所属している以上は、ゼミなんかでも青年期の心の動きというのをどれだけ生々し
く描きだせるかということに意を注いだ、力を注いだんですけども、やっぱりなぜそうし
た事態、そうした状態が生じるのかといった理論的説明というの、自分の中ではあきら

めきれなくて、「なぜそれが生じるのか」と追究していました。いわばこの2つ、「表現」することと「説明」することというのは自分の中でどうも相容れないまま、2つ抱えたまま、どちらも別個に追究していたようなところがありました。

『拡散』(大倉, 2002)

そうした両者の対立というのが、いちばん先鋭化したのが、先ほどこよっと紹介があった、著書『拡散』を書いたときです。で、同時に、この『拡散』を通じて少しこの両者を統合するようなヒントというのも見つかったのかなという気がしています。『拡散』というのは、青年と……まあ、僕と友人とで語り合うことによって、青年たちがどんな心的風景を生きているのか、またそこで青年たち

がどんな「らしさ」を身にまとっているのか、アイデンティティ拡散というなかでどんな「らしさ」を身にまとっているか、そうしたことを何とか「表現」しようとしたものです。また、その背後で、アイデンティティっていったい何なのか、そしてそのアイデンティティをめぐってどんなことが起こっているのかといった、理論的な「説明」も加えようとしています。いわば卒業論文から修士論文に至るまで、無我夢中でどちらかといえばこの「表現」のほうに力を入れて、一生懸命一生懸命書き直すうちになんとなくあの記述ができあがったというところがあるんですけども、その中で、「表現」ということと「説明」ということ、両面において何となくコツのようなものがあるんじゃないかなということに気がきました。

表現

まず表現することですけども、語り合いの息吹、あるいは青年のその人らしさというのを表現するためには、単に語られた言葉を知的に解釈していくのではなくて、むしろその言葉にまもわれていた雰囲気、調査者であるわたし自身に喚起されたもろもろの感覚体験—この、もろもろの感覚体験というのは当

『拡散』(大倉, 2002)

- 青年たちの心的風景や「らしさ」をく表現>
- その背後で何が起きているかをく説明>

→両面においてコツのようなものがある

①表現

- 語り合いの息吹や青年のその人らしさを「表現する」ためには、ただ単に語られた言葉を知的に解釈していくのではなく、むしろその言葉に纏われていた雰囲気や、調査者である私自身に喚起された諸々の感覚体験を丁寧に描き出していくことが極めて重要であるということ
- 現場での「私」の身体感覚に、記述するく私>がもう一度住み込みながら、その感覚が何であり、どこから生じてきたのかを掘り起こしていく作業が必要だということ

然わたし自身の過去の経験と密接につながっているということが、あの本のなかでは明らかにになっていると思うんですけども—、それをていねいに、まず描きだしていくことが、極めて重要であるということ。いわば、現場での「私』の身体感覚に、記述する＜私＞がもう一度住み込みながら、その感覚が何であるか、どこから生じてきたのかを掘り起こしていく作業が必要だということなんです。

説明

また、説明のほうですけども……アイデンティティ問題とは何か、それがどのように収束していくかを説明するためには、①で丁寧に浮き上がらせたもろもろの感覚体験をうまくつなぎとめるような概念、あるいは、そのもろもろの感覚体験が織りなす一つの感性的な全体性、感性的なゲシュタルトというのをうまく表現するような概念というのを作って、それを従来の先行研究との関連の中に位置付けることが必要だということ。逆にこうした感覚体験を無視したり、十分明示しないまま、そこから遊離したレベルで、旧来の学知や概念—例えば自我の統合機能といったエリクソンの提唱した学知がありますけど—、そうしたものによって強引に語りを整理していくことは語り合いの生き生きとした息吹、あるいはそれを語る青年のその人らしさというものを殺してしまうということ。こうしたことを感じました。

②説明

- アイデンティティ問題とは何か、それがどのように収束していくかを「説明する」ためには、①で丁寧に浮き上がらせた諸々の感覚体験をうまくつなぎとめるような概念、あるいはそれらが織り成す一つの感性的全体性をうまく表現するような概念を作り、それを従来の先行研究との関連の中に位置づけることが必要であるということ
- 逆に、こうした感覚体験を無視したり、十分明示しないまま、そこから遊離したレベルで旧来の学知や概念—例えば「自我の統合機能」といった学知—によって強引に語りを整理していくことは、語り合いの生き生きとした息吹やそれを語る青年のその人らしさを殺してしまうということ

具体的にはあの本のなかでは、①の作業としては、協力者の語りを聞いているときに「私』のなかに生じた感覚体験、過去の経験と密接に絡みあっているもの、これを徹底的に洗い直していくということを行っています。②としては世界の中の居場所としての「自分」を失って、何かひとりぽつんと取り残されたような状態になるアイデンティティ拡散。これを「居住自己からの投げ出され体験」と名付けて、それが実は「自」を裏支えしていた「他」なるものを喪失したことによって生じているという理屈付け、

『拡散』では

- ①協力者の語りを聴いているときに「私』の中に生じた感覚体験—過去の経験と密接に絡み合っているもの—を、徹底的に洗い直す
- ②世界の中の居場所としての「自分」を失った状態を＜居住自己＞からの＜投げ出され体験＞と名づけ、それが実は「自」を裏支えていた「他」なるものを喪失したことによって生じているという理論化を行う

ラカンの鏡像段階論なんかも参照しながら、こうした理論構築を行いました。

メタ観察

もうお気づきの方もおられると思いますが、メタ観察というのは今の①と②の作業の全体だということですね。単なる理論的コメント、知的解釈ではなくて、感覚体験を言語化して、あるいは事象の感性的印象を何とか言語化して、それを通じてその何たるかを理解しようとする探究作業だということです。感覚体験というのをうまく言い当てる言葉に出会って、それを従来の学知との関連の中に位置付けることができたときに、研究者として本当の意味での理解というのを生み出したことになるのではないかなというふうに思います。ここで「本当の意味での理解」というのは、頭の中だけで学んだ知識としての概念とは違って、こうして発見された概念には体験というものが受肉化してると思うんですよ。エピソード

メタ観察

- ①と②の作業の全体
- 単なる理論的コメント、知的解釈ではなく、感覚体験を言語化し、それによってその何たるかを理解しようとする探索作業
- 感覚体験をうまく言い当てる言葉に出会い、従来の学知との関連に位置づけることができたとき、「本当の意味での理解」が生まれる
ex) 体験の受肉化した概念
事象の生き生きとしたありよう

記述とメタ観察というのがばっちりかみ合ったような研究というのは、事象の生き生きとしたあり様とともに、そこで使われている概念の意味というのもすごくよく分かる。すごくがっちりとした手応えを与えるようなものになるのではないかなというふうに思います。

ウルトラ体験主義

また、ウルトラ体験主義というのも、実はこうした意味なのではないかなというふうに思います。単なる、「現場からのボトムアップで理論を作りあげていきましょう」というようなスローガンだという以上に、もうちょっとラディカルなものを含んでいるような気がします。それは現場での体験、あるいは身体感覚から遊離した理屈をこねくりまわすのではなくて、むしろそこにこそ肉迫していこうという決意のようなものだと思います。

先生の重要概念はさまざまありますが、間主観性にしろ、両義性にしろ、成り込みにしろ、コペルニクスの転回にしろ、相互主体性にしろ、これはすべて現場での身体感覚あるいは体験のレベルからつむぎだされているというところに注意が必要だというふうに思います。これを単なる知識のレベルだけで受け止めて、

ウルトラ体験主義

- 単なる「現場からのボトムアップ」という以上に
- 現場での体験・身体感覚から遊離した理屈をこねくり回すことなく、そこに肉迫しようという決意
- 「間主観性」「両義性」「成りこみ」「コペルニクスの転回」「相互主体性」は、現場での身体感覚・体験のレベルから紡ぎだされている(単なる「教条」ではない)

→現場での感覚体験を手元に置き、それを表現しながら、探索していくメタ観察作業において、
＜表現＞と＜説明＞は一つになっていく

教条のようにしてしまうと、何だかそこにすごく大きな誤解が生まれて、ひどく窮屈な実践が生まれてしまうような気がします。ともあれ現場での感覚体験というのを手元において、それを表現しながら探索していくウルトラ体験主義的なメタ観察の作業において、「表現」と「説明」は一つにつながっていく。先生がおっしゃった意味はこういった意味なのではないかなというふうに思っています。

編集者からの要請

ところが残念なことにといいいますか、興味深いことにといいいますか、あの『拡散』の原稿を最初に編集者の方に持ち込んだときに言われたこと、要請がありました。それは①の表現の部分だけで十分面白いんだから、小難しい②の議論はいらないんじゃないかと。「説明」の部分は削ってくれと言われました。これはかなり、ちょっと自分ではショックで、やはり長い間、「表現」したいということと同時に「説明」もしたいんだという、そうした長い間持っていたこだわりだとか、今述べてきたようなメタ観察の方法論だとか、そうしたものをすべて否定されたような感じというのもありました。まあ、研究というから

編集者からの要請

- ①の<表現>だけで十分面白いのだから、②の小難しい<説明>は削ってくれ
- 長い間のこだわり、メタ観察の方法論を否定された感じ
- しかし、なぜ②が必要なのか、説得できない

にはやっぱり「説明」が必要なんじゃないかとか。「表現」だけだったら、映画・小説に勝てないぞとか。あるいはそもそも、メタ観察という作業では、「説明」を目指すから「表現」が生みだされてくる、また「表現」があるから「説明」につながっていく、そうした連続性があるのに、なぜその「説明」だけを削らないといけないのか。それを、どうしても編集者の方に、一生懸命説明するんですけども、やっぱりなかなか納得してもらえなかったのです。ここは先生の応援もあってですね、②の「説明」の部分というのは、フォントを小さくして、文字サイズを小さくして入れてもらおうということで、何時間かのやり取りの後、話が落ち着いたんですけども。自分では編集者を説得できなかったですね。何で②の「説明」が必要なのか。これはもしかしたら、最近かもしれないです.....少し説明できるかも、と思い始めたのは。

「育てる」「育てられる者から育てる者へ」

ちょっとここで寄り道をして3番目の.....3番目といいいますか4番目の概念に入りたいと思います。4番目に取りあげたいのが、「育てられるものから育てるものへ」というキーワードです。言うまでもなく、きょうの先生のお話にもありましたけども、これこ

そまさに関係発達論というものの構築につながった、動機づけた根本的な実践的テーマであるということです。また、子どもの個体能力の発達ではなくて、「子ども - 養育者」をひとつの単位としてみる。そしてその関係の変容について見ていったらどうなるかという最初のアイディアです。実は、これを何べんも何べんもわたしは授業を通していわれていたんですけれども、その意味というのを本当に分かっていたのかな？ というふうに最近感じるようなことがありました。

「育てる」「育てられる者から育てる者へ」

- 関係発達論を動機づけた根本的な実践課題・問題意識
- 「子ども-養育者」関係を1つの単位として見るという最初のアイデア

去年の秋から、わたしも乳幼児観察を始めていて、週一回、家庭を訪問してビデオ観察を…… 1歳ぐらいの子どもを観察してやっています。で、その観察をもとに今年の春に紀要の論文をちょっと書いたんですね。タイトルが「鏡像段階成立過程に関する試論的検討」ということで、子どもが鏡に映った姿を「自分」ととらえていくプロセスというのはどのようなものか、言い換えれば、鏡に映った「他」を「自」として引き受けていく過程はどのようなものか、というのを探ったつもりの研究です。当然アイデンティティというのが、「自」を裏支えている「他」が喪失されるところにアイデンティティの拡散が起こるとというのが、わたしの青年期研究の知見だったので、ある意味この鏡像段階に注目するというのは自然な流れとして出てきたものでした。ところが、この論文に対して、先生あるいは先生の奥さんからかなり手厳しいコメントをいただきました。

『鏡像段階成立過程に関する試論的検討』(大倉, 2008)

- 子どもが鏡(ビデオ)に映った姿を「自分」と捉えていくプロセス
- 鏡に映った「他」を「自」として引き受けていく過程はどのようなものか
- 認知発達論から距離をとり、間主観的に子どもの気持ちを把握しようとする

→手厳しいコメント「＜育てる＞ということに目を向けなさい」

「大倉くん、週1回1時間だけビデオ観察、ビデオを回しにいくんじゃなくて、一日中子どもと一緒にいてごらんなさい」「子どもというのがいったいどんな存在なのか、子どもを育てるということに、もっと目を向けなさい」というようなことを言われました。自分としては、従来の認知発達論もちょっと批判しつつ、そこから距離をとって、そして間主観的に子どもの気持ちを把握しようとして一生懸命やったつもりの論文だったんですけども、まあ、こうしたコメントをいただいてしまったということです。

確かに、そう言われてみて改めて考えると、やっぱりその論文は認知発達論的な枠組みというのを批判しつつも、どこか何か認知発達論的な、子どもがいかに鏡像を認識できるようになるか、みたいな話になってる。また、どこか子どもを「ビデオを通して眺めている」という雰囲気なんですよ。ビデオに映った自分の姿を見て子どもがどんな反応

をするかということをエピソード記述としてまとめたんですけども、何か冷たい感じというか、遠巻きに眺めているという雰囲気があるんですね。で、「いったいこの雰囲気は何なんだろう？」と考えて、さっきの先生や奥さんからの言葉を言われて思いついたのは、これだと。自分には「育てる」という問題意識がなかったということですね。

先生の関係発達論というのは、「育てる」という実践的関心があるから「主体としての子ども」、「主体としての養育者」、またその関係の変容に目を向けていくんだということです。

そしてその中でどうしても、やっぱり子どもや養育者が体験しているもの、彼らが生きているものを扱う必要上、間主観性といった概念とか両義性といった概念が必要になってくるという流れがあります。そうした流れを無視して、こうした「育てる」という実践的関心をぬきにして間主観性だ、両義性だ、認知発達論は駄目だなんて言うても、これは説得力ないわけ

- どこか認知発達論的で、子どもをビデオを通して「眺めている」という雰囲気
←「育てる」という問題意識の欠如

「育てる」という実践的関心があるから

- 主体としての子ども、主体としての養育者、その関係に目を向ける
- 彼らが「生きているもの」を扱う必要上、間主観性や両義性が必要になってくる
←養育者が子どもの気持ちをつかんでいる、それと同じ体験のレベルから理論を立ち上げよう

です。客観主義の人たちからの、「何で子どもの気持ちがそうであると言えるのか」といった質問に対しても答えにくくなってしまうと思います。なぜ間主観性なのか、それは養育者が子どもの気持ちをつかんでいる、それと同じような仕方でも子どもの気持ちをつかもうとする、養育者がしているような体験と同じレベルから議論を立ち上げていこうとするからこそ、どうしても間主観的にものを見ていく必要があるんだということですね。

自分の関係発達論でなかったのか？

そういったことで、ちょっと落ち込んだ……自分の関係発達論ではなかった。やっぱり育てるという問題意識、いちばん大事な問題意識も希薄なまま、何となくそれっぽいことをやっていただけなのか……。

けれど、ここはちょっと頑張って、いやそうではなかったんだと、やっぱり関係発達論的だったんだというふうに、ちょっと頑張っ

て言いたいと思います。
わたしの問題意識というのは、やっぱり青年の心的風景、アイデンティティ問題の最中で青年がどんな風景を生きているのか。これを「表現」し、またその背後でどんなことが起こっているのかというのを「説明」することでした。これは2つの意味で実践につなが

自分の関係発達論でなかったのか？

- ①青年の心的風景を＜表現＞し、②背後で何が起きているかを＜説明＞する
→2つの意味で実践につながっている
- ①' 周囲の人間が青年をいかにして了解し、どのように関わったら良いか
- ②' 青年自身が訳のわからない今の状況をどのようなものとして捉え、どのような見通しを持って過ごしていったら良いか

『拡散』の＜説明＞の部分は、②'の実践的関心と深くつながっていた(編集者と共有できていなかった)

っていたと思います。1つは、周囲の人間が、青年が生きている世界をいかにして了解して、そしてその了解にもとづいてどのようにして青年にかかわっていったら良いのか、その指針を何とか導きたいということ。もう1つの実践、これは見過ごされやすいかもしれませんが、今そこを生きている青年自身が今のわけのわからない状況を、どのようなものとしてとらえるのか、そしてその中でどのような見通しをもって今の生活を送っていたらいいのか、について何かヒントとなるような視点を提示したいということ。恐らくは、アイデンティティ拡散の最中にあったかつての自分自身に対して答えたいということです。この後者の実践的関心というのが、どうも、あったがゆえにあの「説明」がどうしても必要だったんだというふうに、最近ちょっと考えるようになりました。周囲の人間がその青年が生きている世界というのを、「どんな世界を生きているか」ということをただ単に了解するだけだったら、もしかしたら「表現」するだけでも良かったのかもしれない。そしてそれに適当な名前を付けただけでも良かったのかもしれない。けれどもわたし個人として、自分が生きていた青年期をこんなふうに理解したいというような、その部分がなかったから、恐らくあそこでの「説明」がどうしても必要だったのではないかということです。

恐らく編集者の方とは、その部分が共有できていなかったのではないかなというふうに、今思います。この後者のほうの実践的関心。やっぱりどういった実践的関心を持つかといったことによって、エピソード記述からどんな意味を読み取るかが、かなり変わってくる。また、どんな議論につながっていくかということが変わってくるというふうに思います。

青年期の実践的関心と、乳幼児期の実践的関心のズレ

ただ、そういった青年期の実践的関心と乳幼児期の実践的関心というのは、やっぱりちょっとずれるなという感じがあるのは確かです。「育てる」という文脈の中には、鏡像段階……確かに青年期の問題を扱うときには、実は、「自分が、自分が」と言っているその「自分」というのが、「他」によって構造的に支えられているという、非常に面白い発見を与えてくれる鏡像段階論なんですけど、「育てる」という文脈のなかでは確かに、やや周辺的な問題ではないかと言われたら、そうなのかもしれないなという気がします。ただ、そこはあえて頑張って、やっぱり青年期の自他の激しい攻防というのが乳幼児期にどのように用意

青年期の実践的関心と、 乳幼児期の実践的関心のズレ

- 「育てる」という文脈の中では、鏡像段階論はやや周辺的な問題かもしれないが…
 - 青年期の「自-他」の激しい攻防が、乳幼児期にどのように用意されるかを探るのはやはり有意義ではないか(そのような文脈をより丁寧に作り上げ、エピソードを提示すれば…)
- どのような実践的関心のもとに理論を作り上げていくかを自覚し、明示化していく必要

されるのかを探っていくというのは、やはり有意義ではないかと。で、そうした文脈というのをしっかり作りあげて、よりていねいに作りあげて、その上で鏡像段階のエピソードを提示する。そうした文脈を提示すれば当然、鏡だけに注目したエピソード記述にはならないと思いますけども、そうしたふうにやっていけば、もしかしたらもうちょっと手応えのある研究になっていくかもしれないなというふうに感じています。

大切なのは自分がいったいどのような実践的関心を持っているのか。私はなかなか青年期について、自分がどんな実践的関心を持っているのか言語化することはできなかったんですけども、それを自覚して、その上でどのような理論を作りあげていくか、その必然性というのを明示していく必要があるのではないかなというふうなことを感じました。

関係発達論は実践的な理論である

まあ、そうしたことでちょっと長くなってしまいましたけれども、関係発達論というのは実践的な理論だということがその本質だと思います。ただ、その際の問題設定の仕方は、もしかしたらいろいろあり得るかもしれないなというふうに思います。先生が出されている「育てられるものから育てるものへ」、これ、大基本だと思います。「子ども - 養育者」関係。で、先生も先ほどちょっとおっしゃっていましたが、「看取るものから看取られるものへ」という、老年期の「介護者 - 被介護者」関係。ちょっと時期をずらしてまた焦点を変えてみれば、こうした問題設定の仕方もあり得るんじゃないかということです。「子ども - 養育者」関係とか、老年期とか、焦点のあて方によって、もしかしたらどんな問題設定をするかということとは変わってくる。

じゃあ自分自身、どんな問題設定をするかということのをちょっと最近考えています。例えば青年期、今言った2つだけだとちょっと押さえられないような気もするんですけどね、青年期の問題を扱うときに。で、なんだろうな……これ難しいんで（笑）、ふと思いついたのが、「他者に与えられるものから自己を与えるものへ」。ちょっとこんなことも考えましたが、青年期の自他関係というのを扱っていくためにどんな問題設定を用意したらいいのか、また、「子ども - 養育者」関係、「育てる」という文脈と関連させてどんな実践的課題というのを用意したらいいのかということを考えている次第です。

関係発達論は実践的な理論である

- 問題設定の仕方は、いろいろあり得る？
- 育てられる者から育てる者へ（子ども-養育者関係）
- 看取る者から看取られる者へ（老年期の介護者-被介護者関係）
- 他者に与えられる者から、自己を与える者へ？（青年期の「自-他」関係）

あまりいくつも取り上げることができませんでしたが、わたしがどんなふうに関係発達論と格闘してきたかということをお話しました。

何かのお役に立てればなと思っております。

話題提供に対する質疑応答

質問者 きょう、鯨岡先生の話と大倉さんのお話を伺っていて、ひとつ伺いたいと思うこと……大倉さんにですけれども。関係発達論、それから大倉さんご自身のことに関して、実践的な関心という、実践という言葉が出てきたかと思うんですけれども、もう少しこの実践という言葉、ほぐしてお話していただきたいなというふうに思います。

単純に参与観察をするというときにも、それは身をもって中に入っていく、で、その中で参与しながら、その中で観察していくという、それ自体を実践というふうに、言うこともできるかと思うんですけれども、単純にそれだけではないようにも思える。というところがあって、それはたぶん鯨岡説もそうだと思うんですけれども、大倉さんご自身の「実践的な」ということと、それから鯨岡先生の関係発達論に関して、「実践的」といっていることの、その2つについて、もう少しほぐしてお話いただければ……。

大倉 正直ちょっと、どういうふうに答えたらいいのか分からないところがありますね。たぶんそれはわたしが実践という言葉をあいまいに使っているところからだと思うんですけれども。

まず参与観察ということと比べて実践という言葉……ちょっと、わたしが実践といいたところは……参与観察というのは、実践的意識じゃなくても、参与観察……それこそ間主観的にとか、あるいはその場に入ってエピソードを生き生きと描きだすんだとか、そういった意味で参与観察という言葉を使うんだったら、できるというところがあると思うんですね。要するに、実践的な問題意識というものがなくても、とりあえず現場に行って、そこにいる人たちの気持ちをつかんで、その場を何となく描きだすんだということはできると思うんですけれども。

ただ、もうちょっと言いたいのは、やっぱりそこで、「自分が何をしたいのか」、例えばそれこそ、青年期だったら、「学生に対してこんなふうにかかわりたい」とかですね、実際にそれが「かかわる」ということに直接還元されなくてもいいと思うんですよ、「こんなふうに了解をすることによって、自分自身こんなふうな構えをもって、青年と接していき

い」とか。具体的な対応法がそこから出てこなくても、そういった形で、広い意味で、「自分がどうしたい」、「自分の構えをどうもっていきたい」というようなことと、つながっているようなこと。これを、そういった意味を込めて実践という言葉を使いました。

自分としてはやっぱり、エピソード記述をやるんだやるんだと一生懸命やってみて、「きみ、育てるという問題に目を向けていないね」と言われたときに、ひとつ抜けていたところがあったという感じがあったので、参与観察はできる自信はあったかもしれないけれども、どういった実践的な問題意識のもとで参与観察をしていたのか、この事象から何を取り出したいのか、そういったところをしっかりとこれから自覚していかないといけないなというふうに思っているという、そういったことですけど。答えになったでしょうか。

質問者 ありがとうございました。